

小一

### ACNU 投与および緩和的放射線照射により治療した皮膚型リンパ腫の犬の 1 症例

○玉本隆司 堀 泰智  
酪農大伴侶動物医療学

【はじめに】犬の皮膚型リンパ腫は、リンパ腫の中でも比較的まれとされており、発生頻度は 5%未満と報告されている。化学療法に対しては抵抗性を示すことが多いが、ニトロソウレア系抗がん剤である CCNU の投与は比較的奏効率が高いと報告されている。今回皮膚型リンパ腫の症例に対し、CCNU と同様のニトロソウレア系抗がん剤である ACNU の投与と、局所療法としての放射線照射を行ったため、その概要について報告する。

【症例】北海道犬、未去勢雄、15歳 4 カ月齢。1 年半前に臀部腫瘤に気づき、増大したためおよそ 2 カ月後に切除生検を行った。病理組織検査および遺伝子クローナリティ解析により T 細胞性リンパ腫と診断され、COP ベースプロトコールにより治療を行ったが、副作用のため 2 カ月ほどで治療は中断したとのことであった。その後腫瘤は全身に広がり、一部潰瘍化や出血も認められるようになったため、精査と治療を希望され、酪農学園大学動物医療センター内科を受診された。右頸部、左口唇部、右内股に巨大な腫瘤を認め、それらは自壊し、排膿していた。それ以外にも頭頂部から尾部まで、全身に大小様々な大きさの痂皮や結節が認められた。いずれの部分の押捺標本においても、大型でクロマチン凝集の微細な異型リンパ球が多数採取された。同日に ACNU を  $20 \text{ mg/m}^2$  で投与したところ、病変の著しい縮小が認められ、3 週間後には部分寛解が得られた。2 回目の ACNU 投与後まで反応性は良好であったが、その後増悪が認められた。肉眼的には体表の病変は初診時に巨大な腫瘤が認められた 3 カ所のみであったため、その部位に対して合計 3 回ずつの放射線照射をおこなった。その後も治療を続けたが、第 97 病日に末梢血液中に腫瘍細胞の出現を認め、第 102 病日に自宅にて斃死した。

【考察】CCNU は皮膚型リンパ腫に有効とされているが、輸入薬であること、カプセル剤のみで分割できないことなどが問題点としてあげられる。ACNU は国内で入手可能であり、注射薬であるため用量調節がしやすく、静脈内にボラス投与可能であるなどのメリットがある。本症例では初回および 2 回目までは効果を発揮しており、CCNU の代用に十分なり得ると考えられた。また、放射線照射は局所制御には有効であり、初期に放射線により腫瘍体積を減量した上で ACNU による化学療法を実施すれば、より有用性が高いと期待される。